

巻頭言

2021 年度は COVID-19（新型コロナウイルス感染症）によるグローバルな災禍が 2 年目に突入する年となり、多くの人々が期待した有効な治療薬やワクチンの開発が追い付かないまま新たな年度が始まった。このコロナ禍の時代に入学生たち、また、卒業していった学生たちの辛さはいかほどだろうかと思われる。大学では、すでにオンラインでの学生生活を経験してきた学生が、文学部・文学研究科教育促進支援機構の活動の重要な担い手となっており、この『フォーラム人文学』第 19 号からは異例の大学生活を強かに作り上げてきた学生の努力をうかがい知ることができる。

本誌を初めて手にとられた方には、そもそも教育促進支援機構（以下、支援機構）とは何か理解しにくいかもしれない。支援機構は、学生生活を実りあるものにできるよう、大阪市立大学において文学部・文学研究科の学生と教員とが協力し多様に活動する組織である。活動の実態は年度によっても一様ではないが、2021 年度は学生がイニシアティブをとり活動企画や会議進行をし、教員との協議を通じてブラッシュアップしてきた。

一例を挙げるならば、文学部の公式案内冊子にあたる『文学部案内』（最新版は「OPEN THE LITERA」がタイトル）作成において、教育促進支援機構の編集担当学生が中核的役割を担っている。それを支えつつ大学の公式案内冊子として完成させるために、学部教員からなる広報・HP 委員会と連携し編集委員会が組織されており、大学事務がこれをバックアップしている。大学・学部の公式案内冊子を、いわば学生主体で作成しているというのは、極めてユニークな取り組みと言える。

このように支援機構の活動は、大学における研究・教育とも深く関わるため、内容の深さはもとより大学組織の複雑なしくみなどとも相まって、現役学生がそれを行うことには困難がつきまとう。学内での葛藤が生じることもしばしばであるが、そうした困難を乗り越えて 1 年間の活動が展開され、後年に引き継がれていくのが伝統となってきた。

とりわけ過去 2 年間は、コロナ禍が多くの活動に大きな影響を与え困難をもたらしてきたが、そこから様々な経験も蓄積され始めており、新たな道を拓きつつあると言える。この『フォーラム人文学』第 19 号が、そうした軌跡を伝えるものになっていれば幸いである。

文学部・文学研究科教育促進支援機構
2021 年度 会長 辻野けんま
(教育学コース教員)